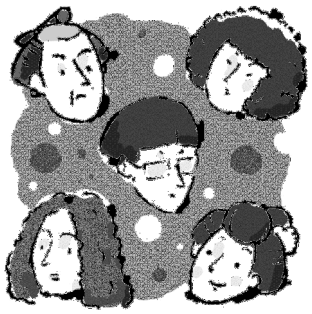
今月のテーマ　万人幸福の栞

新しさを知る

丸山竹秋

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所二代目理事長・丸山竹秋（一九二一―一九九九）のことばを掲載します。



え・城谷俊也

朝のラジオをきいていたら、座談会で東大の小野清一郎博士が「自分は歎異抄を、今日まで六十年近くも読み続けてきたが、読むたびに新しい感じをうけ、異なった深い内容を教えられるので、じつに尊いことだと思っている」という意味のことをいわれているのが耳に入った。

私は、ハッと思った。

六十年間も、何度も読みかえして、そのたびに新しいことを教えられる。そんなことがやはりあるのだ、これは大切なことだ……と。

歎異抄というのは、親鸞聖人のいわれたことを、弟子がまとめたもので、ごく短い文章である。それを六十年間、読みかえしてきたということも素晴らしいけれども、そのたびに新しいことを教えられるというのは、歎異抄の内容も、また素晴らしいのである。

ただ私はこれについて思うのである。『万人幸福の栞』は、歎異抄よりも長いのであるが、しかし私自身の経験によれば、何回読んでも、新しいことを教えられる。

現在十年あまりも、ほとんど毎日のように、この「栞」の中の、どこかを読んでいるのであるが、読むたびに、何か新しいことを教えられる。ああなるほど、そういうことだったか、ハッと気がつくというようなことが、じつにたくさんあるのである。

その一々をここに書くことはむろんできない。ただ一、二だけをあげてみると……たとえば、

事情の最も高潮に達した時、その波動が、人の脳に伝わって気がつくようになっている」という言葉がある。これは「栞」の二十四頁「今日は最良の一日、今は無二の好機」の中の文字だが、はじめの十年間ばかりは、私はこれをべつにどうと思っていなかった。ただそういうものであろうか……といった軽い気もちで、よんでいただけである。ところが、昭和三十四年に生理学を勉強する機会を与えられて、とくに大脳生理学の講義をきいたり、すこし手伝ったりしているうちに、どこかの早朝講座の会場で「栞」の輪読をきいていると、この言葉がじつにするどく、私の耳に入ってきた。

気がつくということは、事情が最も高潮に達して、その活動が、脳に伝わったときなのだ……。

大脳生理学では、まだこのことは、証明されていない。将来誰か新しい学者が、その証明を手がけるであろう。それはともかく、脳の神秘なはたらきについて、いくらか知っている私には、じつに強烈に、心を打ったのである。それと同時に、新道徳は「大間性の生理に立ち、心理に即し、人間生活の一切時一切所にかなった、大自然の法則」である（三三頁）という言葉が、すさまじい迫力をもって私をとらえたのであった。

このようにして、日々新しいことを「栞」から、教えられるように思うのである。教えられないというのは、こちらがぼんやりしているときか、なまけているときかである……私は、はっきりとそう思っている。新しい発見は自分の心しだいなのだ。

（月刊『青年』1961年4月号）